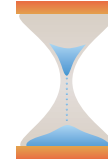


高校3年から母の介護を、家族とともに看続けた10年

1995年に日本テレビ入社後、冷静かつ確かな語り口でニュースやスポーツ番組でお馴染みになった町さんだが、その姿の裏には、重篤な障害を抱えたお母様を10年間に渡って介護し、最期を看取った苦難の人生が隠れていました。2011年6月にフリー・アナウンサーとして独立し、医療・福祉問題に真摯に取り組み始めた町さんに、お母様の介護と現在の福祉社会が抱える課題についてうかがいました。



1971年8月3日生まれ、さいたま市出身。95年に立教大学文学部英文学科を卒業後、同年、日本テレビ放送網に入社。2011年6月にフリーとして独立するまでアナウンサー、報道記者として活躍。10年にわたる両親の介護生活を綴ったエッセイ「十八歳からの十年介護」(発行:武田ランダムハウスジャパン)を11年10月に出版。



町 亞聖 (まち あせい) さん

1990年1月、高校3年生3学期の始業式を迎えた日の朝、普段どおりに朝の支度をしていた母が突然、倒れました。父の車に急いで乗せ、総合病院に緊急入院した翌日、医師から言い渡された病名は「くも膜下出血」。とても危険な状態で、一刻も早く手術が必要な容態だと宣告されました。

アナウンサーになって4年目、発見した母の真っ赤なシート

幸いにして、入院後3日目に行われた手術は成功したものの、その翌日に集中治療室で交わした会話が、はっきりと聞き取れる母の声を聞く最後の機会となってしまいました。その10日後には再び容態が急変。母はその後、言語障害、右半身不随、知能低下という重度の身体障害と戦い続ける人生を余儀なくされました。

90年5月にリハビリ専門病院に転院した後、車椅子の操作、トイレ、着替えなど日常生活の最低限のことを病院内で訓練しました。リハビリを続けることで母はみるみる回復を遂げ、91年1月には無事に退院して、家に戻ってきました。

共働きだった家計は母が倒れた後、母の医療費と私を含めた3人の子供の学費などを父だけの収入で賄いきれなかったため、私は奨学金で91年に立教大学に進み、入学後はアルバイトをしながら母の面倒と家族の食事の支度などの家事をこなす日々が過ぎていきました。その間、母の介護を通じて感じた福祉関連の問題を改善するきっかけになればと、卒業後は介護で学んだことを広く世間に伝えられる仕事に就くことが目標になりました。そして95年に卒業後、晴れて日本テレビのアナウンサーとして採用が決まりました。

そしてアナウンサーとして4年目を迎えた98年6月下旬。夕食時に、母の車椅子のシートが真っ赤に染まっているのを発見しました。あわてて母を近所の産婦人科に診てもらったのですが、告げられた病名は、末期の子宮頸がんでした。

母はその後、大学病院で放射線治療などを行いながら2カ月後に

いったん退院。12月に再入院してからは、抗がん剤治療を受けました。翌年の99年になって、当時としては耳慣れなかった「緩和ケア」を担う地元病院の緩和治療科に治療の拠点を移した後、99年秋には家で母の最期を看取る覚悟を決めて在宅看護に切り替えました。自宅のベッドでしばらく過ごした後、母は11月9日に永眠しました。

できることを数えていく、プラス思考で取り組む

母が倒れた90年、高校生だった私は、まさか母の面倒を看ながら生きていくことになるうとは、微塵にも思っていませんでした。でも長女でしたので、病院での母の看病をしながら、弟と妹の母親代わりとして家事をこなし、学業を両立しました。

そしてアナウンサーとなってからは、父の収入でまかない切れず、車椅子生活の母に配慮して買ったマンションのローンも私の収入で大半を返済していましたので、一家を支える言わば“大黒柱”的な役割を担った奔走の毎日でした。がんで母が亡くなるまで、その10年間の生活は、息つく暇もないほどあっという間に過ぎていきました。

母の末期がんにより「死」と直面したことで、人生の限られた時間の大切さを身にしみて感じました。介護期には母の姿を見るにつけ、「もっと早く病院に連れて行ってあげればよかった」、「がんを早期に発見する手助けを、なぜできなかったのか」という後悔の念はいつもつきまわりましたが、一方で振り返れば、自分たちが置かれた当時の年齢と経済環境の中で「できる限りのことはできた」、「最善は尽くせた」という実感も湧いてきました。

母の介護を通じて感じたことは、できないことを指摘する「マイナス思考」ではなく、できることを数えていく「プラス思考」で取り組むことの重要さでした。「家族がいなくて何もできない」のではなく、「家族がいれば何でもできる」という、気持ちの持ち方と発想の転換ができたからこそ、私たち家族はそろって、母の介護を全うできたと思っています。

その人を思う強い気持ち、そして沿い続けること

いま、「介護には何が重要か?」と問われれば、「その人を思う気持ちを強く持ち、沿い続けること」と答えるでしょう。あと、付け加えるならば、経済的な側面の準備でしょうか。私たち家族の場合も、経済的にも苦しい時期が長く続き、「備えあれば憂いなし」という諺を実感しました。

また、母が倒れた当時は今の社会環境とは違い、公的介護保険の整備(2000年4月～)はまだ先の話で、私の周りには介護の相談に乗ってもらえる人さえいない状況でした。今では介護保険制度も整備され、役所の相談窓口や民間のサービス施設など、介護の手助けとなるところも多くあります。仕事を含めて自分なりの人生を歩きながら、介護保険やサービスなどのシステムを上手に活用して負担の少ない介護に取り組める時代になりつつあります。ですから、まだ十分とは言えませんが、その整いつつある社会システムを活用して、一人きりで抱え込まず、家族や医療・福祉関係者、周囲の方々と協力して介護に取り組むための態勢づくりが重要だと思います。

あわせて、取材を通じて感じていることですが、自らの介護に完璧さを求める気持ちが強い人ほど、息が詰まって追いつめられる傾向にあるようです。とりわけ、男性にその傾向が強いように思います。私自身は、ずっと“ズボラ”にやっていたつもりでしたし、そのお陰か「苦しい」とか「きつい」とは感じませんでした。ですので、言い方は悪いかもかもしれませんが、「介護はちょっと手を抜きながら、上手に装う」ことが精神的なポイントなのかもしれません。

今後は少子・高齢化社会を迎え、高齢者が高齢者の面倒を看る時代が目前に来ています。その時は精神的・経済的な余裕があればそれだけ、必要十分な介護の態勢を築けることは、言うまでもありません。(談)



新しい発想の介護保険
セント・プラスの

ちょこっとプラス

- 要介護認定を受けても加入できます。
初回契約は要介護2まで、再契約は要介護3以上でも可能。
- 100歳まで加入出来ます。

- 実際のサービスを受けてからその費用を補償する形の給付金で、要介護3以上になり各保険のサービスが必要と当社が認めた場合に支払います。